春シーズンの化城かや
紅紫にそみし花衣
ぬきかへゆくぞとこしへの
光りはこゝにやとる見よ

新躰詩學び卒へし友の許に

平野ゆき子

無情が有情の体なれば　有情は無常の姿なり
何か恨みん世の中は　うつろひ易きものなるを
さはさり乍ら君と我　月かぱろなる上野山
花散りかゝる隅田川　行きみし事もかりつるに
春糸遊のもゆる野に
すみれつみつゝうたひつゝ
雲雀の聲の地におちて
西の山もとかすむ時
ともに柴生にやすらひし
追懐こそは殘りたれ」

秋晩鐘を遠く聞き
千入の紅葉かざしつゝ
見渡すかぎり稻の穗の
黃金の波なす田の面より
飛び立つ雀眺めてし
思ひいでこそのこりたれ」

むつみし友の業成りて　嬉しき今日の其翌に
辛き別離の潛みしよ　君行きますか故郷に
雪や螢と學び舍に　つみし光を身にかひて
君よゆきませ故郷に　飾る錦を家づとに

みやげの劍

つ　ね　を

戰さにいつた　兄さんが
敵の大將　うしろ手に
かたく縛つて　つよさうに
坊がたのんだ　みやげよと
一ぱん好きな　劍持つて
ゆふべ歸つた　夢を見た